

ローマ書連続講話 第2回

ローマ書 第4章～6章

2010年9月12日（東京 新宿）

奥田 昌道

律法至上主義のユダヤ人 二つの対立 創世記15章と17章（アブラハム） 永遠の契約 祝福の印としての割礼 報酬と恩恵 律法は何のためか 罪とは何ぞや ローマ書5章 罪と死と 律法 恩恵と義の賜物 ガラテヤ書1～2章（律法と福音） ガラテヤ書3章（キリストの十字架） ガラテヤ書4～5章 ローマ書6章後半（永遠の生命） 祈り

●律法至上主義のユダヤ人

ローマ書をずっとやっておりますけれども、ローマ書というならば、

「結局、主イエス・キリストだけだ。このお方にしがみつき、このお方と一緒に生きていけば間違いない」

という、単純なことを言っている。しかしながら、人はそれだけでは納得しないですから、「なぜ、そうなんだ？ なぜ、いろんな災いがあるのか。罪とは何なのか、審きとは何なのか。律法は何のためにあるのか？」

とか思う。特にパウロは、一方では律法至上主義のユダヤ人と闘わねばなりません。他方では、異邦人に対して、「イエス・キリストは救い主である」ということを伝えていかなければなりません。異邦人は——我々でもそうでしょ——

「いや、我々には我々の宗教があるから、結構ですよ」

と。まるで物売りが来たら、「足りていますから結構ですよ（要りません）」というふうに、追い返そうとする。それに対して、「そうはいかんよ」ということを一方では言わなければならぬ。また他方、ユダヤ人たちは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネといったキリストの直弟子たちですら本当にキリストの十字架の御業ということが分かっていなかった。

といいますのは、律法主義——律法はモーセという偉大な指導者を通して与えられたものです——これの中からキリストも出てこられたし、モーセといったら神様と人間の間に立つて、なかだちとして彼らにとっては絶対に犯すべからざる存在なんです。そのモーセを通して与えられた律法は、死に至るまで永遠に続く。

だから、キリストが来て、死んでくださった。素晴らしいことをお話しただけです。そしてキリストにすがって救われるから結構だけれども、同時に合わせて、律法というものも大事にしないといけない。律法というものと——これは旧い宗教的な生活様式です——それにプラスしてキリストというわけです。



ところが、パウロは

「もうキリストだけでいい」

と、はっきり言って、律法を否定した。だから、パウロは当然、迫害を受ける。ちょうど、キリストが十字架に付けられて殺されたのと同じ運命を辿ることにならざるをえない。というのは、パウロ自身がキリスト信者を迫害して、引っ捕らえてはエルサレムへ連れていくという、「神のために」と思っただけでやっていたわけです。キリストも「神のために」とやっておられる。「神のために」とやっておられた、その同じユダヤから出た、片一方はイエス・キリスト、他方は祭司長・学者たち・パリサイ人たち、そういう流れとキリストは対抗しておられるわけです。

キリストは律法を貴びながら、

「律法の一番深いところは神の愛だ。神様は生命を与えようとなさっている」

と仰った。ユダヤ人は律法にがんじがらめになって、神様がもうどこかへ行ってしまうている。

「自分は律法にひっかかっていないか、落ち度はないか」

と、たえず律法というものは自分を反省させる。毎日毎日が、「どこか律法に反していないか」と。律法に一つでも外れたら、99点では合格できない、100点満点でないと。そうすると、自分たちの生活は、隅々をたえず「律法違反がないか」ということで、自分も捜しているし、他人も捜している。見つけたら、「反省しなさい。犠牲を献げなさい」と。そうすると、神様がどこかへ行ってしまう。神様は、愛どころか、義の神、審きの神として、恐ろしい姿で迫ってくる。その中に呻吟していたのが、ペテロだってそうだったんです、ヤコブもそうなんです。

そういう中でパウロは、キリスト教徒を迫害していた時に、キリストご自身が、

「なんぞ、我を迫害するか！」

と言って現れて、パウロは一端、死んだんですね。そして、アナニヤの按手を通して甦った。その時に聖霊を受けた。そして深く祈った。十字架の何たるかをはつきりと示された。そこで、パウロによって初めて十字架の奥義が示された。ペテロ・ヨハネ・ヤコブではだめなんです。直接にキリストの直弟子ですから、いくら聖霊を受けても本当の十字架の意義というものが分かっていないわけです。パウロは、そのように否定者でありましたから、否定者がもう一回引っ繰り返されると、過去の自分の宗教的な生き方を——熱心なんです、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と胸を張っていた——そのパウロが完全に自分の過去を否定した。そしたら新しく、

「キリストだけで行こう。割礼なんか要らない。律法は呪いである」

と、そこまで言いました。そうすると、保守派の人たちから見たら、

「パウロはけしからん！」



ということになるわけです。そういう壮絶な戦いがバックにあつて、そしてこのローマ書が書かれ、その他、使徒行伝もありますね、ガラテヤ書も。そういういたものは壮絶な戦いの記録なんです。

私たちは異邦人として、遠くの国のはるか昔のことを今、読んでいるわけですが、それでも、それを読む時にはもう一度、

「その時代でいいたいどうだったのか、それが今度は私たち異邦人にとってどういう深いことを秘めているのか」

ということを確認したいわけです。パウロははつきり言っています。

「我々は真理に逆らっては力がない。真理に即していけば力がある」

と。信仰というとか、

「不合理なるが故にわれ信ず」

（註：ラテン語：Credo quia absurdum、クレド・クイア・アブスルドウム）、キリスト教神学者テルトゥリアヌスによる3世紀初頭の著作『キリストの肉について』の一部を要約した言葉）

とか、どなたか言ったそうですね、賢い人が。

「わからなくても、信じたらいい。分かるようなものは信仰ではない」

とかね、知ったかぶりをして、そう言う。

そうじゃない。神様は真理の神様で、我々に「なるほど」と納得させてくださる、得心させてくださる。得心しなものは本ものではない。心から「そうだ」と言えて初めて、そのために命も捨てようという気持ちも起こってくるわけです。

ところが、世の宗教というのは往々にして、そういう得心もしないで、

「これを信じてないと危ないよ、何でもかんでもがむしやらに信じ抜きなさい」

というものが、他宗教においてもキリスト教の中でも、あるわけです。信仰の上からいろいろな疑問があると、「それは不信仰です」と言つて、バサツと切られるという経験を私は過去に何度かいたしました。そんなことですから、これは非常に現代的な問題でもあるということを分かつていただきたい。

今日は、欲張つて、4章から6章までです。これは集中講義ですので、しょうがないんです。1章ずつゆっくりやっていかないと、一回目は1章から3、4章までやりました。今日は4章から6章まで。このローマ書は若干、大学の講義みたいところがある。だから、皆さん、予習と復習が絶対、必要です。「そんなのはもうこりごりだ」と思われないで、「新しき勉強を始めるんだ」という、生涯教育です。生涯教育と言つたつて、大学での勉強は、知識を教えるけど、生命は与えない。「大学の教育を受けて生命がきました」という授業があつたら、素晴らしいけれども、それが無い。

ところが、私たちがやっていきますのは——この前は「ヒルティ」をやりました——全部、



生命に至る道をしっかりと体得して、体に刻みこんでいく。やがて我々の体は衰えていきますけれども、うちに培われた永遠の生命というのはますます熾ん（さか）んになっていく。そういう生命への道を学ぶ。それには若干、人生経験というのがプラスになります。あるほうがいい。でも、若い方々は、

「ああ、そうか。人生の先輩があんなことを言っている。だから、いろんなところで躓（つまず）いたり、いろんなこと「失敗など」をしたって大丈夫だ。結局はプラスになるんだ」

と。そういう、我々は人生の先輩として、あとに続く者にモデルを示さなければいけない。残念ながら、ここには若い人は少ない。非常に少ないけれども、ピチピチした若い人にも来ていただきたいと思います。老人大学ではありませんので、我々は青年学級でありたい。体は衰えても、心は常にフレッシュである、若々しい、生命（いのち）して緑（き）している。そういうお気持ちでつくんでいただきたいと思います。

●二つの対立

それで、このプリントに、上と下の段にわけてたくさんのかきましました。キーワードです。ユダヤ人やギリシア人、それから夷（えびす）という二つ。ギリシア人は智者（ちやう）です、智慧ある人々。それに対して、まだ文化文明に浴（あ）していない——当時のことを考えてください——つまり未開の民という人たち。それから、割礼のある者と割礼のない者。律法のある者と律法のない者。罪に対しては審判——罪から出てくるものは死です——そういう、罪、審き、死というものと、相応（さうおう）するのは生命、恵み、義の賜物（たまひ）。

上のほうは「義」というひとことだけ書きました。義が審判となつて表れる。「生命」とは関わりがなかった。上の段に書いてあるのは全部、旧い旧約時代のオーソドックスなユダヤ教の世界がこの上のほうです。それは肉なる人に向けられている。だから、この上に書いてあるものは全部だめなんです。

下の段に書いてあるのは、我々は非智者であり、割礼がなく、律法もなく、彼らから見たら蔑（さげす）まれていゐる存在でありながら、実はそれは非常に祝福された者だという、恵みの世界に我々はいゐるということ、この下に書いた。生命が来ます、恵みの中にあります、義の賜物をいただきます。そして、我々は霊なるひとに目覚めさせていただく。新しきひと、霊なるひと。こういう下のほうにあるのが実は素晴らしい世界です。

「**後（あと）なるものは前（さき）になり、前（さき）なるものは後（あと）になる**」

と福音書にありました。あとから来る者が実は祝福されている。この上に書いてある人たちは当然、己（おのれ）を誇ります、「自分は大した者だ」と。下にある非智者、割礼のない、律法もない人を、呪（のの）われて捨てられた存在だというふうに見くだしていました。ところがどっこいそうじゃないよと。こちらの下のほうに書いてある、恵みに生き、義の賜物をいただき、



霊なる人として生まれ変わっている、その者が本当の世界へ入っていく。

上に書きました優等生たちは実は、神様の目から見たら、優等生でも何でもない。

「うなじこわくして心に割礼なき者よ」

とパウロは言っている。

「己に誇り、人を弾劾し、そして自分は教師だと威張っている。でも、君たちのやっていることは何だね」

と言って、散々批判しているのが2章、3章にありましたでしょ。そういうことが、パウロは自分自身を顧みてよく分かるわけです。

「だいいち、お前たちは、あの救い主キリストを十字架に付けたではないか。大犯罪人ではないか。神様に背き続けたけしからんやつではないか」

ということのパウロは言うわけです。そういう律法に誇り、割礼を誇っているお前たちこそ本当に悔い改めて、救われるべきである。救いへの道は何か。「イエス・キリストを信ずる」という、そこしかない。かつてはモーセを通して律法を示された。でも、律法は罪を認識させ、罪の審きを招き、そして審きの結果は死である。

「罪の払う報酬は死である」

と。ここへ行つて、閉じ込められて、追いつまされてしまう。そういうものから、目覚めて、生まれ変わらなくてはならないと言う。

ヨハネは言っていますね、

「ひと新たに生まれずば神の国に入ることはできない」

と。ヨハネは律法のことを一切もう言わなくなりました。ヨハネ伝では律法のこととは出てこない。「ひと新たに生まれずば」と言われて、ニコデモは、

「ではどうやったら生まれるんですか。お母さんのお腹に入るんですか!？」

と。とんでもない。霊によつて新たに生まれる。つまり、下に書いてある世界です。恵み、義の賜物をいただく、そして生命をいただいて、霊なるひとに甦る。その構造は、ヨハネは一切言わない。それは秘密なんです。そのヨハネが「新たに生まれなければならない」と言っていることの深いことわりはどこにあるかということ、ローマ書はつきりと解き明かしてくれている。ヨハネの福音書によつて生命の世界を知らされる。

「ラザロよ、甦れ！ 出てこい！」

と。そういった生命を示された、その奥義はどこにあるか。なぜ、そういうことになるのか。それをローマ書はきちんと論理的に解き明かしてくれている。

私は法律学でしょ。法律学をやつて、始めは小池先生にばかにされたんですよ。「奥田君は法律学で、窮屈やな」とか。「私はいやだよ」とまでは仰らなかつたけれども。自由奔放な先生から見たら、私みたいな人間はどうも付き合いにくい人種のように映つたらしい。ことごとくに「きちんとしてくださいね」と先生に言うから。でも、私は法律学をやつて良かった



たと今は思います。つまり、法律をやることによって、パウロの論理がわかるんです。

だから、小池先生にもつと法律を勉強してほしかったなと今思っている。お兄さん（小池政美）は法学部で、秀才でしたからね。だから、先生はお兄さんが羨ましかったでしょうね。その反動で文学のほうに行つて、「ゲーテは、ダンテは」とやっている。まあそれはそれとしまして。

本当にやはり論理というものは大事なんです。理性に向けて説得するということが大事です。しかし、そこに留まっていたらだめで、そこを突きぬた生命の世界に入らなければいけない。

ローマ書4章を見ますと、まずアブラハムが出てきます。

「アブラハムはいつたいたどういうことだったのか」

ということが出てきます——「肉につきて」というのは、「生まれつきの人間にとって」ということ——「いつたいた何をいたいたのか」。

「さらば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか。² アブラハム若し行為によりて義とせられたらんには誇るべき所あり、然れど神の前には有ることなし。³ 聖書に何と云えるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。

それから、割礼のことが出てきます。

⁹ されば此の幸福はただ割礼ある者にのみあるか、また割礼なき者にもあるか、我らは言う『アブラハムはその信仰を義と認められたり』と。

「アブラハムはその信仰を義と認められたり」と書いてあるけれども、どんな時に、いかなる状態で「信仰を義と認められた」のか。割礼を受けてからなのか。それとも、割礼前の段階だったのかと。

¹⁰ 如何なるときに義と認められたるか、割礼ののちか、無割礼のときか、割礼の後ならず、無割礼の時なり。」（ロマ4・11～10）

割礼の後ではない、まだ割礼のない時に、神様に

「お前はそれでいいんだよ」

と言われた。「義とされる」というのは、「それでいいよ」ということ。そういうように受けとってください。つまり、神様が受け入れてくださる。「それでいいよ」と言つて、抱きしめてくださる。むしろ、その抱きしめてくださる、「それでいいよ」ということを生涯にわたって記念するために割礼を与えられる。つまり、ハンコを押された。どこに押されるか、男子のオチンチンの包皮を切り取るという——ちよつと我々から見たら、なんでそんな残酷なことをなさるのだろうかと思えますけれども——それを生まれて八日目によれと言う。全部やれと。そういうことがあった。



●創世記15章と17章（アブラハム）

ここを受けとろうと思ったら、どうしても創世記を見ないと、そのところがよくわかりませんので、創世記の15章と17章を少し今から駆け足で読んでみます。まず15章です。アブラハムはウルという所から出掛けて、神様の導きによってカナンの方へと入って行くとする。

「親族から離れて、私が示す地に向かって歩みなさい」

と言われた。その時は実は75歳だった。まあ、今とは年齢計算がどうだったか知りませんが、75歳といえますと——私は今77歳ですから——今流に言えば、かなり年齢が進んでいる。しかも、奥さんのサラは10歳若いけれども、奥さんは石女というまずめいまして、胎が開かれない、子どもが産まれないという肉体。子どもができないということは非常に苦痛なんです。跡継ぎがいまませんから。サラ自身もそのことを思っている。アブラハムにとってもそれは心の痛みです。そういう状況で、15章へ行きますと、

「これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

²アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」

³アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

半分、恨みがましく言ってますね。

「神様、ウルから出て目指す所へ行けと仰ってくださったのはありがたい。その通り私は歩んできました。けれども全然、子どもを下さらない。子どもがないということは私一代で亡びてしまう。それでよろしいのでしょうか。家の跡継ぎにはエリエゼルという僕に継がせるほかにありませんか」

と。それに対して主は、

「いや、それじゃない。あなた自身から生まれる者が後を継ぐべし」

「ヒエ〜!？」

というわけですね。

⁴見よ、主の言葉があった。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

⁵主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」

満天の星です。数えきれません。

そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」



つまり、満天の星、数えきれない星のように、あなたの子孫はなるんだよと。全く想像もつかない、そんなことを突然、神様は仰った。

6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

なにも神様は突然、「外へ出て来い」と仰ったのではなくて、こうやっていくつかの問答があつて、アブラハムが何を気にしているか——子どもが生まれない、跡継ぎがない——そのことを非常に苦にしているということをやちゃんとお分りになつたうえで、そして夜、外へ連れ出して、

「星を見てごらん。あなたの子孫はあの星のようになるんだ」

と。これはとてつもない祝福であり約束である。でも、おもわずアブラハムは、

「おそれいました。はい、信じます」

と、そこで平伏したというわけです。それが神様に嘉せられた。

7 主は言われた。

「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

8 アブラムは尋ねた。

「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

9 主は言われた。

「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのものに持って来なさい。」

10 アブラムはそれらのものをみな持つて来て、真つ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。11 はげ鷹がこれらの死体をねらつて降りて来ると、アブラムは追い払った。

12 日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。13 主はアブラムに言われた。

これがすごい預言なんです、出エジプトのところまでちゃんと預言なされる。

「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隸として仕え、苦しめられるであろう。14 しかしわたしは、彼らが奴隸として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。」

出エジプトです。たくさん荷物、金銀財宝を積んで、車に乗って出て行きました。そして、後からパロの戦車が追いかけて来たという、あの出エジプトです。

15 あなた自身は、長寿を全うして葬られ、
175 歳まで生きます。



安らかに先祖のもとに行く。¹⁶ここに帰って来るのは、四代目の者たちである。アブラハム、イサク、ヤコブそしてヨセフです。ヨセフと12人の兄弟たち。このヨセフの時代に帰ってくるということになるわけです。

それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」

¹⁷日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。¹⁸その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、¹⁹カイン人、ケナズ人、カドモニ人、²⁰ヘト人、ペリジ人、レファイム人、²¹アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の土地を与える。」（創世記15・1～21）

まあエライ約束をなさったもので、パレスチナ問題が起こってしまった。奪われた民族からしたら、けしからんことではないかということになりますし、約束の民だから絶対これは神様からいただいたものだから一步も引かんぞという。これが今に至るまで、イスラエルの中東紛争の火種になっています。もうちょつと神様はなんとかしてくださらなかったのかなと、思いたいところですけども、こういう約束がある。

それから、16章はとぼしますが、アブラハムは子どもが生まれぬものだから、サラと相談したうえで、サラの召使ハガルによつて子どもが生まれる。ハガルが女主人サラを蔑むようになる。そこでサラはハガルを迫害する。ハガルはとうとう夜逃げする。そういう場面が16章に出てきます。ハガルが産んだ時は、アブラハムは86歳だった。75歳であいう祝福の約束を受けてから12年経つてやつと、しかもハガルという女召使を通して男の子を得た。これがイシュマエル。ところが、神様は「跡継ぎはイシュマエルではない」と仰る。アブラハムにしたら、「お前の身から出る者」というから、

「自分から出て行けば、相手の女性は誰でもいいものではありませんか？」
と言うと、

「いかん。ちゃんと正統なる婚姻関係から生まれた子でないとだめだ」
ということを仰る。

●永遠の契約

それで17章に行きます。86歳だから、ほぼ10年経つて、イシュマエルが生まれる。それから更に13年を経て、アブラムが99歳になつて——気の長い話でしょ——要するに75歳でスタートして、やつと99歳になった時に、もう一度、神の言葉が臨むというのがこの17章です。これがとても大事なんです、今日の関係では。

「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。

「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従つて歩み、全き者となりなさい



い。²わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」

³アブラムはひれ伏した。神は更に、語りかけて言われた。

⁴「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。

⁵あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。⁶わたしは、あなたをますます繁栄させ、

諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。

前の75歳のときにいただいた、そういう約束はまだ抽象的、一般的でした。「星のように子孫が増える」という約束でした。今度はかなり具体的な約束がここで与えられる。そして、「アブラム」から「アブラハム」というふうにな前まで変える。「多くの国民の父となる」という。

⁷わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。⁸わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」

⁹神はまた、アブラハムに言われた。

「だからあなたも、わたしの契約を守りなさい、あなたも後に続く子孫も。

¹⁰あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。

¹¹包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。¹²いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷であなただの子孫でない者も皆、生まれてから八日目に割礼を受けなければならぬ。¹³あなたの家で生まれた奴隷も、買い取った奴隷も、必ず割礼を受けなければならぬ。それによって、わたしの契約はあなたの体に記されて永遠の契約となる。

つまり、契約というのは、ただ頭の中で受けとって「はい」と——文書を交わすわけでもありません——体に割礼という印を施す。これは一生伴いますから、

「それを通して、あの昔の契約を思い起こしなさい」

ということ。割礼を受けたから祝福があるのではない。祝福、約束を受けた、それを忘れないように体に刻みこむために割礼というものが恵みのいわば証^{あかし}として与えられた。

¹⁴包皮の部分を切り取らない無割礼の男がいたなら、その人は民の間から断たれる。わたしの契約を破ったからである。」

¹⁵神はアブラハムに言われた。

「あなたの妻サライは、名前をサライではなく、サラと呼びなさい。¹⁶わたし



は彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする。諸民族の王となる者たちが彼女から出る。」

¹⁷ アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。

前の75歳のときは、「ハッ、ハアッ！」とおそれいつてただ信じたんですけれども、今度は、「なに言っているんだ、神様は。まあ一応、お言葉だからいただきますけどね、信じられるもんですか」と、ここで言っているわけですよ。

しかし笑って、ひそかに言った。「百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか。」¹⁸ アブラハムは神に言った。

「どうか、イシュマエルが御前に生き永らえますように。」

¹⁹ 神は言われた。

「いや、あなたの妻サラがあなたとの間に男の子を産む。その子をイサク（彼は笑う）と名付けなさい。わたしは彼と契約を立て、彼の子孫のために永遠の契約とする。

イシュマエルについてもずいぶん祝福が与えられているんですよ。イシュマエルのことも絶対忘れないと。ハガルもイシュマエルもちゃんと聖意の中に留められています。^{みこころ}

²⁰ イシュマエルについての願いも聞き入れよう。必ず、わたしは彼を祝福し、大いに子供を増やし繁栄させる。彼は十二人の首長の父となろう。わたしは彼を大いなる国民とする。²¹ しかし、わたしの契約は、来年の今ごろ、サラがあなたとの間に産むイサクと立てる。」

²² 神はこう語り終えると、アブラハムを離れて昇って行かれた。

²³ アブラハムは、息子のイシュマエルをはじめ、家で生まれた奴隷や買い取った奴隷など、自分の家にいる人々のうち、男子を皆集めて、すぐその日に、神が命じられたとおり包皮に割礼を施した。²⁴ アブラハムが包皮に割礼を受けたのは、九十九歳、²⁵ 息子イシュマエルが包皮に割礼を受けたのは、十三歳であった。²⁶ アブラハムと息子のイシュマエルは、すぐその日に割礼を受けた。²⁷ アブラハムの家の男子は、家で生まれた奴隷も外国人から買い取った奴隷も皆、共に割礼を受けた。

これがドーンとのしかかっているから、「永遠の契約」を破るユダヤの民は全部、民から排除される。「永遠の契約」といわれたら、これは守らざるを得ない。

ところが、パウロは

「割礼は要らん」

と言ったから、これはもう大変なことです。主イエス・キリストは、特に割礼のことは何も仰らない。律法でいろんな決まりが出来上がってしまった。初めは、「十誡」だけだった。つまり十誡を具体化するさまざまな律法が作られてしまった。それをキリストはもう一回、



「十誠の根本精神に還ろう」とされた。十誠は恵みの言、愛からきている。

ですから、今申しましたように、ローマ書4章を受けとろうと思つたら、このバックグラウンドを知っておかなければならない。だから、創世記の15章と17章をあげました。律法に関しては出エジプト記に出てきます。それからレビ記、申命記に繰り返し出てきますが、それは省略します。

律法を与えられた理由は、モーセを通して出エジプトした。シナイ山で神様から律法をいただく。石の板に十誠が刻まれている。それを民に示して、これによってお前たちは生きるんだというわけです。律法は祝福への道と呪いへの道の二つを示している。

「律法に従つて生きるならば、あなた方は祝福を受ける。ところが、律法を破ると、

あなた方に死が、災いが臨む。どちらを選ぶか？」

と言われて、

「もちろん生命への道、この律法を守ります！」

と言つて、「エイ、エイ、ヤー！」とやっていたわけですね、威勢よく。ところが、そのあと背いてばかりしておるんですよ。たびたび審きを受けて、「姦淫した者は一日で二万三千人死んだ」なんてのがコリント書簡に出てきましょ。そんなのがイスラエルの民ですけれども。

律法は、祝福の道と呪いの道の二つが示されている。命か死か。ただその「命」といいましても、いわゆる「永遠の生命」という角度は出てきません。この世的に現世において神から祝福を受けて、命はながらえる、長生きする、健康を護られる、財産はちゃんといただける、子孫は繁栄するという、現世的な意味の祝福なんです。それに対して、破りますと、そのすべてを失う。そして地獄というのが待っている。そういうのが律法です。そしてその律法は、更にさまざまな具体的な日常生活の規定が山と作られて、今度は律法を守るということが物凄く重荷になってくるわけです。

●祝福の印としての割礼

ローマ書4章に戻りますと、さきほどの、

「アブラハムが祝福を受けたのは、割礼を受けてからではない。祝福を受けて、恵みを受けた、その印として割礼を受けた。だから、割礼を受けることによって祝福されるのではない。祝福の印として割礼がある」

ということをご自分で言っているわけです。

「¹⁰如何なるときに義と認められたるか、割礼ののちか、無割礼のときか、割礼の後ならず、無割礼の時なり。」

無割礼の時の信仰というものが喜ばれる。

「アブラム、ヤハウエーを信ず。これを彼の義と認め給えり」



という、無割礼の時の信仰が喜ばれて、割礼という印をいただいて、ハンコを押してもらった。ということは、アブラハムが無割礼で祝福を受けたといたしますと、割礼のない無割礼の人はこのアブラハムにつながっていけないわけです。それから、割礼を受けた者、ユダヤ人たちは、割礼が祝福をもたらすのではなくて、信仰を——神様を信じた、お言葉に、「はい」

と言った——それを喜ばれたのだから、割礼というのはそのあとに來たのだから、割礼を受けている者も、結局、無割礼時代のアブラハムを通して祝福を受ける。だから、割礼があるうとなかろうと、そんなことは関係ない。すべてアブラハムに直結すれば、アブラハムの受けた祝福がその人に臨む。

では、割礼は何のためか。割礼は祝福の印、ハンコを押された。ハンコを押してもらってなくても、アブラハムの子孫であればそれでいい。

「アブラハムの子孫だと言いなから無割礼でいいのか」

という問題が次に出てきますけれども、

「それ(割礼)は要らん」

ということをパウロは言うわけです。それがここに出てきます。

11 而して無割礼のときの信仰によれる義の印として割礼の徴を受けたり、これ無割礼にして信ずる凡ての者の義と認められん為に、その父となり、¹²ま

た割礼のみに由らず、我らの父アブラハムの無割礼のときの信仰の跡をふむ

割礼ある者の父とならん為なり。」(ロマ4・10～12)

無割礼で信ずるすべての者——異邦人ですね——が義と認められる。それはそれで受け入れていただく。その為にアブラハムは父となってくださった。それから今度は、ユダヤ人は割礼を受けています。しかしながら、割礼だけではなくて、アブラハムの無割礼の時の信仰にならおうと、それに直結する、そういう割礼ある民もやはりアブラハムを通して祝福にあずかる。

アブラハムは「多くの国民の父」といわれています。約束によって。つまり、ユダヤ人だけでなく、異邦人すべての諸国民の父と約束されたのですから、ユダヤ人があの契約の徴としての割礼を受けた、それが何かではない。無割礼時代のあのアブラハムの信仰につながるということによって初めて受け入れられる。ところが、

「割礼、割礼と言っているのはおかしいではないか」

というのがパウロのここでの言い分なんです。ここではまだ律法のこととは出てきておりません。割礼のことを言っているわけです。

●報酬と恩恵

まずそれが一つ、「割礼問題」です。その次に、「律法」というものが出てきます。その律



法と割礼の関係はどうなるのか。モーセという素晴らしい指導者を通して律法が与えられた。これを守るなら祝福が臨む。破るなら死がやってくる。割礼問題は、アブラハムに繋がることによってセーフということ、なんとか切り抜けられるけれども。そのあとの430年後に律法というものが臨んできた。そうすると、後なるものが前なるものを否定したのか。そうじゃないと、パウロは言う。

「430年後に律法というのが忍び込んできた。こんなものはくそくらえだ、じゃまものだ。否定要素だ」

と言う。なんで否定要素か、じゃまものなのか。

これは恩恵めぐみというものが何かということ。恵みというものは一方的なものです。報酬と恩恵の関係を言ってますね、4章4節で。働く者への報いは報酬です。自分が働いた。だから当然、報酬を受ける。自分は律法を守った。だから、永遠の生命を下さる。

ところが、律法も何もない。あるいは、律法があつたって律法を守れない。そういう無資格者、落第者、不合格者、そういった者に対して、

「でも、神様の愛はお前に生命を与えた。だから、お前を救ってやりたい」と。これが恵みだと言う。

「へえ、そんな結構なものがあるんですか。それはちよつとよろしおまん。じゃ、わしは絶対そつちの恵みの道を選びますよ」

なんて。ところが、律法の人は、

「お前みたいな自堕落な生活していて、恵み恵みと言うのはおこまがしい。ちつとはわしに見習え」

というのが律法のほうの言い分なんです。律法は後からきた。後なるものが優れているに決まっているではないかと。つまり、アブラハムのあの素朴な信仰を否定して、

「律法によって初めて神様に喜ばれる。これをモーセを通してお示しになった。だ

から、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、みな律法を守れ！」

これがオーソドックスなユダヤ教徒、その弟子たちの立場なんです。ところが、パウロはちがう。律法というのは途中から、恵みの道がせつかく在ったのに、そこに途中から割り込んできた、異質物である。律法の道というのは、障害物競争を思ってください。

恵みの道は、「素晴らしい景色の富士山だな、いいなあ」と思いながら下を見ないでも歩いて行ける。これが恵みなんです。恵みだけにすがって歩いて行く。上のほうから来る引力がどんどん天の高みへ連れて行ってくれる。これがアブラハムがいただいた祝福だった。

ところが、律法というのは、障害物競争みたいなもので、ハードルを越えても越えても永遠にハードルがある。ちよつとボヤボヤしていたら引っくり返る。いっぺん引っくり返ったら、もういっぺん一からやり直し。すぐろくみたいに一からやり直します。例えば言いましたら、あの地雷です。どこに隠れているかわからない。踏んだらドカーンとアウト。



地雷を除去する運動をやっています。それと一緒にです。律法というのは人の欠点を暴きたてる。

「だめです、律法に反する。だめです、これに違反している」というわけです。

「私は律法を全部守っています」

と言ったあの善き金持ちの青年に、

「持ち物を全部売り払って貧しい人に施さない。そして私に従ってください」

とキリストに言われて、彼は悲しみつつ去って行ったという。表面的には律法を守っているようではありますけれども。

律法の根本は愛なんですわ。

「己のごとく隣人を愛せよ」

というのは愛でしょ。それは無条件であるはずなんです、神様の目から見たら。神様に従うのも、

「力を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くし、神を愛せよ」

という、「尽くし、尽くし」というのは空っぽになることです。自分の中が空っぽになって、そのくらいに神様にひたすら従って行く。これが

「力を尽くし、精神を尽くし、汝の隣人を愛せよ」

献げ尽くせという。神様に献げ尽くすだけかと思ったら、

「隣人にも全部献げ尽くせ、自分は空っぽで従って来い」

「それはとてもだめですわ」

というのがあの富める青年でした。真面目な青年ですよ。

つまり、キリストにおいては律法というのは生命への道であるけれども、人間にはその律法というのは人間の肉の弱さを突く。肉なる人間というのはどうしたって己を大事にします。神様と己とどっちが大事か、いざとなったら己です。己が守られている限りでは「神様、神様」と言ってますけれども、こっちがピンチになったら、もう神様なんか蹴飛ばす。

「私は自分を守りぬく」

という自衛本能があります。これが「肉」なんです。隣人へ、豊かな有り余るものから出すのは喜んでやる。しかし、自分を否定して隣人に与えるのは、そんなことはできません。これが「肉」です。

だから、律法を表面的に守っていることは、決して律法を全うしていない。そのことをキリストは福音書の中で随所に示しておられる。キリストは表面的に律法を否定しておられない。

「永遠の生命をいただくにはどうしたらいいですか？」

とあの青年に問われて、キリストは



「律法には何と書いてあるか？」

と聞いておられるでしょ。

「これがあります。それは私は全部守ってきました」

「それでは足りない。もう一つあるね」

と言って、律法が本当に示しているのは、律法を乗り越えて、律法を生きながら律法を乗り越えた彼岸の世界、突き抜けた世界で神様と一つになって生きること。これができたのはキリストだけなんです。キリストは神様にも己を献げ尽くして、人々にも己を献げ与え尽くして、最後は十字架の死でしょ。

「いや、キリストみたいに律法を全うしても、最後は死ではないですか」

なんて。それは我々の罪、審き、死を全部ご自分のものとして引き受けたから。我々が当然受くべき、

「罪の払う報酬は死である」

という、この罪と死——それに審判が伴うから——このマイナス要因を全部引き受けた。ハードルがたくさんあって、ハードルを全部引き受けた。地雷がたくさん埋まっているのを全部引き受けた。そして、キリストの吸引力で恵みの世界へグングングン、空を飛ぶごとくに羽ばたかせてくださる。

「これがキリストの凄さだよ」

ということが後で出てくるわけです。

●律法は何のためか

だから、この律法問題は、430年後に律法が出てきて、それで恵みはふつ飛んだのか。いやそうじゃない。では、律法は何のためか。人間がいかに神様に背く存在か。人間がいかに罪深いか。そのことをはつきりと分らせるために律法はやってきた。律法というのは非常に気の毒な問題を背負って現れた。

「いったい律法は何のためにあるのか？」

と、それが13節から出てきます。

「¹³アブラハム世界の世嗣^{よつぎ}たるべしとの約束を、アブラハムとその裔^{すえ}との与えられしは、律法に由らず、信仰の義に由れるなり。¹⁴もし律法による者ども世嗣^{よつぎ}たらば、信仰は空しく約束は^{すた}廃るなり。

つまり、430年後にモーセを通して律法が与えられたが、それによってアブラハムに臨んだ祝福は全部ふつ飛んだのか。いや、そうじゃないと。

¹⁵それ律法は怒りを招く、律法なき所には罪を犯すこともなし。

「怒り」は審判です。およそ律法というものがなければ、はつきり罪は認識されない。罪は自覚されない。律法というものがあって初めて犯罪というものが現れてくる。



16 この故に世嗣^{よつぎ}たることの恩恵^{めぐみ}に干らんために信仰に由るなり、是かの約束
のアブラハムの凡ての裔^{すえ}、すなわち律法による裔のみならず、彼の信仰に効^{なう}
う裔にも堅うせられん為なり。

アブラハムのほうが素晴らしいのであつて、律法というのは途中から迷いこんできた流れ弾^{だま}にすぎない。流れ弾なんかに振り回されたらだめだよ。そういうことをパウロは言うわけです。

では、アブラハムの信仰とはどんなものかということが以下にある。99歳で子どもが産まれそうにないときでも、ずっと神様を信じたから、それで神様が子どもを賜った。まず75歳で祝福が臨み、躓いてイシュマエルを産んでしまったけれども、それでもなお神様はアブラハムを捨てなかった。そして、99歳でもう一度はつきり具体的な約束をなさった。しかし、アブラハムは心の中で笑っていた。それでも神様は約束を貫かれた。そして、現実にイサクという子どもが与えられた。ここではやや美化して書いてある。

19 かくて凡そ百歳に及びて己が身の死にたるがとき^{さま}状なると、サラの胎の死にたるが如きとを認むれども、その信仰よわらず、²⁰不信をもて神の約束を疑わず、信仰により強くなりて神に栄光を帰し、²¹その約し給えることを、成し得給うと確信せり。」(ロマ4・13～21)

さっきの創世記を読みますと、とんでもない。心の中で笑っているではないか。サラだつて笑っている。神の使いが来た時にサラは笑った。御使がサラに

「お前は笑ったね？」

と。サラは

「いえ、笑っていません」

と、そういう問答が出てきます。旅人の姿をもって三人が現れた時にアブラハムに約束を下さる。それをサラが天幕の陰で聞いていて、心の中で笑っている。そのように、アブラハムも人間なんですよ。そんな信じがたいものを、模範生のように「信じぬきます」なんていう立派な姿ではなかった。

だから、私は言いたい。アブラハムの一時的な不信仰にもかかわらず、約束は変わらない。恵みは変わらない。その貫きです。これは神様の名誉にかけてそれを貫かれた。それを皆さん思ってください。でないと、

「アブラハムは立派な信仰だ。だから祝福された。我々は立派な信仰はありません。」

それならだめですね」

なんて。信仰が根拠になつたらだめなんです。アブラハムの信仰というのは大したことない。私はそれを言いたい。彼も人間ですよ。ただし、アブラハムは部分的には、一時的には疑っていたり躓いたりしながらもやつぱり、神様の約束がずうっと原動力となつて引つ張つてくれている。



我々の人生もそうなのではないでしょうか。毎日毎日の中で時には躓いたり疑ったり、不信仰になったり、絶望したり失望したり、いろんなことがあるけれども、

「やっぱり神様の愛、キリストの十字架の愛、キリストの御霊の愛、これは凄い。御霊の生命の力は凄いんだ。私のこの死の体をもぶち破って、生命を全うし給うんだ」

と。そういうふうには——我々には戦いがありますよ、あるけれども——最後はやっぱり神様の御言、約束、恵みは絶対に変わらない。それにすがっていくというのが私たちの道なんです。

だから、皆さん、どうぞ、

「自分は不信仰です、自分の信仰はまだ弱くて」

とか、そんなことはもう言わないで——自分を見るということが躓きなんです——神様、キリストだけを見ていく。しかも、約束だけを見ていく。これが本当の信の道です。つまり、恵みを恵みとして受けとる。

「自分は恵みに価値するか、自分は立派な信仰があるか？」

と、己を見たら沈むんです。キリストだけを見て行ったらいい。

「信仰による義」というのは、受けとりようによつては、

「私は信仰がありますから。あなたは信仰がないからダメですよ」

と自分を誇ってしまう。そんなレベルではない。神様の恵みは、こちら側の信・不信にかかわらず貫く。これに

「まいりました！ それに委ねるしかありません。信なき我を哀れみたまえ」

という、あの苦しんでいた癩癰の子ども父親さんです。キリストが山の上で変貌された時、下りてきたら、大騒ぎだった。

「お弟子さんたちに治してくれと言ったけど、全然だめでした」

と。癩癰ですね、子どもは泡をふいていて転がり回っている。親父さんは、

「もし、イエスさま、あなたにおできになるなら、この子を癒してください」

とお願いしたら、

「もしなんて言うな。信する者にはすべてのことができるんだよ」

「はい、信じます！ この信なき我を哀れみたまえ」

と言った。そうしたら、キリストは病の癩癰の霊を追い出された。それで子どもは治ったということが出てきます。そういうふうには、神様の御力は凄い。我々は、

「信なき我を哀れみたまえ」

と。信仰すらありません。立派な信仰なんかありませんと。

「ひたすら貴神の恵み、愛が貫くから、それによって私は生きていけるんです」と。そこに、どうぞ、徹してくださいね。



● 罪とは何ぞや

それがローマ書4章なんです。そして5章へ行きますと、始めの1節から11節まではちよつとあとからいたします。ここは結論的なことが書かれている。さきほどの4章とのつながりから言いますと、今まで割礼の問題と律法の問題をやってきたわけです。そして、あらあと、

「罪とは何ぞや、審判とは何ぞや、義とは何ぞや」

という問題が出てきます。その問題を書いてますのが12節からです。

「¹²それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡て

の人罪を犯しし故に、死は凡ての人に及べり。」(ロマ5・12)

これはアダムあの神話があります。アダムが神様のご命令に背いて、生命のリンゴを食ってしまった。それで生命から外れた。死が臨んだ。そういうことが創世記に出てきました。いわばアダムという人間の祖先が神様に背いた。これによって罪——背きが「罪」です。から——その罪というものが世の中に侵入してきた。そして、その罪というものは必然、死というものをもたらす。この「死」というものは、肉体の死であると同時に、魂の死、霊の死です。

さて、アダムが背かなかつたら、永遠に生き続けるのかどうか、これはよく分りませんけれども。でも、土から造られたものは、やはり土に還るといふのは当然の宿命だと思う。ですから、アダムが背いた。それによって人間が死んだという。その死のほうは、むしろ肉体の死も含んでいるでしょうけれども、より重要なことは霊の死、靈魂の死です。

「神は霊なれば、拝する者も霊と^{まこと}真とをもつて拝すべし」

「肉なるものは役立たない。霊なるものだけが大事だ」

と、ヨハネ伝に出てきました。やはり我々は、この見えるもの、肉体、そういったものに囚われているけれども、それが祝福されることだけが祝福ではない。むしろ、それを突き抜けて、肉体はどうなろうと、

「霊は義の故に生命の中にある」

と、ローマ書8章に出ています。私たちはしよせん土から出てきて土に還る。そういう存在として造られたわけですから。その肉体は朽ち果てようと、土に還ろうと、その肉体が存在している間に朽ちないものをちゃんといただいている。それが朽ちない世界を継いでいく。

だから、地上にある生き方——地上の百年の人生——その中でしっかりと神の生命を蓄えこんで、内なる人が日々成長していく。ついにキリストと同じ姿に化せられていく。それをやらなければいけない。肉体のことばかり問題にして、健康がどうだ、就職がどうだ、そういうこの世のことばかりやっていますと、霊が死んでしまう。

「まず霊なる神様の世界を第一にやっていくならば、おのずと必要なものは添



えて与えられる」

とキリストも仰った。

「まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、すべて必要なものは添えて与えられる」

随伴すると言う。随伴するものばかり追い求めたら、肝心^{かな}要めの生命がなくなってしまうよ。ちょうど、ペテロがキリストだけを見つめて歩いて行ったら、湖の上を歩けた。そのように、キリストだけを求めていけば、必要なものはすべて添えて与えられる。そして、この肉体が枯れはてる時には既に立派な霊体が中に備わっている。それがスーッと向こうへ入っていく。

その用意ができてない人は、向こうにそう簡単に行けないですよ。そうでしょ。同質なるものしか入れないんです、向こうに。神の国に入れる者は神の国に入れるのにふさわしい姿に変わっていないくては。そうでしょ。これは誰だってわかるでしょ。真つ黒な人が突然、真つ白な所へ行けるはずがない。真つ黒な人はまず真つ黒な所に入って、それから

「頼みますから！ 段々段々、光にふさわしい中身にしてください」

ということ、長年修養して、魂が光に耐えられるようになってきたら、やがて向こうへ入れていただく。全部を救おうとなさっているんだけど、それには時間がかかるんですよ、闇の生活をしている人は。

ところが、この世で少々苦難がありましようとも、病気に苦しもうが、いろんな迫害を受けようが、本当に不幸な——ラザロのような、金持ちの門前でパン屑をもらって、犬が傷をなめにくるという——そんな悲惨な生活でも、死んだらサッとアブラハムの懷へ往く。金持ちには立派な葬式をしてもらいました。そして向こうへ往って見たら、アブラハムの懷でラザロがニコニコしている。

「おい、ラザロよ、助けてくれ！」

と叫んでも、

「いやいや、それはあかん。こことそことの間に大きな淵があつて渡れない」

と、そういう話がありますね。あれは本当だと思いますよ、譬話でも。既に現世においてそれにふさわしい、即ち甦りにふさわしい質をいただいていなければ、肉体が枯れはてたあと、その人の霊が霊体をいただいて、スッと向こうの世界に入れるか。それとも、まずは地獄へ行つて、真つ暗な所から這い上がってくるか。これは大変なことですよ。そのことが、皆さん、本当にわかれば、少しはここでの地上の生活が変わるんですけど。

残念ながら、向こうの世界からあまり帰ってきてくれませんか。時々、臨死体験をした人がいろいろなことを語りますが、なかなか信じてもらえない。皆さんはここへ来ておられるということは、それこそもうかなりわかっていらつしやると思う。でも、わかっていても、肉体を宿としている時はそれをコロッと忘れるんですね。見えるところ



に囚われる。だから、

「目を覚まして祈っていないさ」

とキリストは言われる。心の目をちゃんと、霊の目を覚まして、靈感を豊かにして、神の言葉を見る。ビュンビュン受けとれるように、絶えずそういう姿でいなさいと。それは常に十字架をもっているということです。

「あなたの肉なる人は十字架に付けられた。もはや、旧いあなたは生きていない。十字架で全部死んでいるんだ。罪につきては死にたる者。旧き人は十字架に付けられた。霊において神に生きる。キリストの義のゆえに」

ということです。

●ローマ書5章

それでこのローマ書5章12節から、

「¹²それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人罪を犯しし故に、死は凡ての人に及べり。

ちよつと待つてよ、「凡ての人が罪を犯した」というけど、アダムは罪を犯しましたよ、神様の御言に背いて。我々は、何も御言が臨んでいない。

「御言が臨んでいないから、罪を犯しているなんてちよつと言わないでください」ということが言えそうですね。それに対してパウロさんは何と言うか。

¹³律法のきたる前にも罪は世にありき、……」（ロマ5・12～13）

律法が出てくる前、即ちモーセ以前、アブラハムから430年間、律法はなかった。しかしそのアブラハムの時からモーセまでの430年の間にも、罪というのはやはりあった。いや、アブラハムの前の先祖たちにおいてもあったんだよと。

つまり、アダムから営々と続いている人間の歴史を垣間見れば、律法があろうとなかろうと、人間はみな罪の性質をおびている。罪の性質というものがある。それが形となって表れるのが、罪を犯すという姿です。それが、御言がきて御言に背くという形で表れていく。御言が臨まなくても、「己を高しとし、神を神としない」という、その心の姿を私は「罪性」と言いたいと思います。この罪の性質というものは万人に、肉体をもつて生まれた以上は、自己防衛本能があつて、当然、己を大事にしたい。生存競争のために己を守りたい。これがあります。だから、神様に対して、

「いや、私は独立したい。あなたの下でいちいちゴチャゴチャ言われる筋合いはありません」

と、生意気にもそういうふう言う。その独立も、人を蹴落としてでも自分はいいポストにつく。人を支配したりとか、人と比べて遜色のない立派な人間になりたい。そうやって自分を立派にしたい。「神様にすぎる」なんて、そんな意気地のないことを言うなど。若い



人はみなそうです。

僕はそれでいいと思っていますよ。若い人は己を立派にしてください。そして、どこかで行き詰まって初めて目が覚める。それでいいと思う。何も努力もしないで、始めからクリスチャンホームに育って、「恵み、恵み、恵み」と言われたら、弱いんですよ。闘うことを知らない。そうではなくてやはり、一人一人が人生という、一人一人の人生を精一杯努力して、自分が理想とするものに向かってやってみて、そして挫折して、初めて親の有難さ、あるいは恵みの有難さがわかると思う。だから、あまり小さい時から、「信仰、信仰、信仰」と言ったら、その人の本当の成長が止まります。これは教育の上で大事なことです。大事なことは、道徳的に良いこと悪いことを私ははつきり教えた。

「人を恨んだりするのは良くない。人を羨ましがったりしたら良くない。人にはそれぞれ賜った天性、天分がある。それに忠実に生きるんだよ」

とか。やや道徳的かも知らないけれども、人は何に向かって生きていくか。「信仰」ということを言わない。人は善に向かって生きていく。

「義を見て為^せざるは勇なきなり」

なんて言葉がありますが、何かそういったいろんな場面に我々はぶつかりますね。

「知らん顔するんじゃない。だめじゃないか、そんなことをしたら」

とか言ったら、ぶん殴られることもあるかも知りません。とにかく、正しいものを正しいとし、間違っているものを間違っているとする。良心に従って生きる。利害関係に関係なくそれを貫く。そういう人間であれ、立派な人物であれ。こういう教育はやっぱりやるべきですね。いじめを見たら、割り込みなさいと。

信仰をもちだす必要はないと思う。誰だつて、善悪の判断はできます。そして、肉という面ではやはり、悪よりも善を選びたい。いじめるのではなくて、弱っている者の味方になりたい。これが人間に備わっている良心というもので、これがあるはず。それを鋭敏にしなさい。そして良心に恥じない人間になりなさい。これをしっかり教育してもらったらい。

心ではそうだけど、実際やがて現実になったらそうはいかん。就職になればやはり自分を生かしたい。いくつも会社を受けていながら、

「あなた、他の会社を受けてますか？」

「いいえ、受けてません。あなたの会社だけに入りたいと思って来ました」

と、平然と言うでしょ。まあとにかく、自分に有利なことは言うけれど、不利なことは一切言わない。「うそをつく」というのは、「私はうそをついてません」とよく人は仰るけど、不利なことは隠して、いいことだけ言うというのは、これは「うそ」なんです。プラスとマイナスを全部さらけ出すというのが本当の真実でしょ。ところが、そうでないということとはやはりうそをついていることになりますよね。



ですから、まずそういうふうにして、律法というものがなくても、信仰というものがなくても、人間は良心というものがある。それをしっかり育て上げるような教育を小さい時からやっていったら、大学生くらいになったら、もう少し目覚めますからね。

「いったい、なんで人間は死ぬのか。神様なんかいるのかいないのか。神様がいたら、なぜこの世の中にこんな不合理なことがまかり通っているのか。なんであつちこつちに戦争があるのか。災いがあるのか。そもそも人間が罪を犯さないように、神様が始めから創っておけばいいじゃないか。そんなでき損ないの人間を創って置いて、やれ罰するの罰しないのなんて身勝手もいいところだ、身勝手すぎるではないか」

とかね。さっきのイスラエル問題でもそうですね、「あなたの子孫にこの土地を与える」なんて神様に約束された。

〔註:18その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、19カイン人、ケナズ人、カドモニ人、20ヘト人、ペリジ人、レファイム人、21アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の土地を与える。」(創世記15・18～20)、

「7わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。8わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」(創世記17・7～8)〕

アブラハムの子孫は喜んでいられるけれども、周りの人間を見てごらんさい。

「いやいや、彼らは罪びとだから、アモリ人やカナン人らの民族の罪が満ちあふれた。その審判としてアブラハムの子孫が入っていく。その土地をもらう。だから、他の民族は追い払っていいんだ」

と。追い払われた民族は神様を知らないわけですから、それぞれの宗教がある。そうすると、宗教対立、宗教戦争ということになる。それはもう止まるところがない。これはどうしようもない。私はむしろ、神様はなぜあんな種をつくったのか、もうちよつとうまいことやれなかったのかと言いたくなるくらいのことなんです。でも、それらのマイナスも全部、キリストが背負っておられる。

●罪と死と律法

そういうことで、ここに罪と死と律法の問題が7節に出てくるけれども、モーセまでもやはり死というものが人間を支配していた。アダムは実はパターン、一つのモデルだと。アダムというものにおいて、アダムはその肉の姿を表していた。生まれながらの人間はみなアダム型なんです。神様よりも己を大事にする。隣人よりも自分を大事にする。そういった、つまり「肉」という姿がいわゆる「原罪」と言われるものです。そこに臨んでくるのが、



「死」というもので、肉体の死および霊の死がある。靈魂の死、こちらのほうが恐ろしい。キリストはルカ伝の中でも言っておられます。

「肉体を殺しても魂を殺すことのできないものを恐れることはない。肉体を滅ぼしたのち、魂をゲヘナの火、地獄の火に投げ入れる権威ある方を恐れなさい。二羽の雀も一アサリオンで売られているのに、あなた方は雀よりもはるかに勝れる者だ。あの雀だって、神様の御許しなくて一羽も地に落ちない。あなた方の頭髮も全部数えられてる」(ルカ12・4～7)

と。そのくらいに、つまり隅々までご存知だということですよ。そのあなた方は雀よりもはるかに素晴らしい存在だ。だったら、この世のことにこだわらないで、

「まず神の国と神の義を求めよ」

と。そういうことをキリストは仰っている。キリストはその通りの生き方をなさった。

●恩恵と義の賜物

「¹³……されど律法なくば罪は認めらるること無し。¹⁴然るにアダムよりモーセに至るまで、アダムの咎^{とが}と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは来らんとする者の型なり。」

そして15節から今度は、下のほうの段に書いた、

「生命の世界、恵みの世界、義の賜物、霊なる人の誕生」

こちらの次元のことが語られている。「罪だ、審判だ、死だ」というものが猛威を振るっている。そんなものに屈する神様だと思ふのかと。アダムという一人が失敗したからといって、人間全部が死に定められるなんていうことがあったら、神様の愛は黙ってはおれない。キリストという凄い切り札を遣わして、そんな「罪だ死だ審きだ」は全部、自分が吸い取ってしまった。吸収してしまった。そして恵みが溢れるんだと。

アダムとキリストとが一对一で対応するのではない。アダムが1なら、キリストは何万倍の凄さを持っている。たった一人の人(アダム)によつて死が臨んだ。キリストというお方の生命は溢れて仕方がない。比較にならない。次元がちがう、質がちがう。これが言いたいところなんです。だから、「恩恵^{めぐみ}の賜物^{たまもの}」という。「賜物」というのは、こちらに根拠がない。一方的に下さるものです。だからそれは賜物という。「恵み」というのは、一方的に神様が下さるもの。この一方的な神の賜物、愛、それは恵みの中に愛がある。恵みというのは要するに、

「こちらはふさわしくないけれども、与えてくれる」

という、それを恵みと言っているわけです。恵みの中身は何かというと、愛なんです。愛は生命を下さるわけです。

¹⁵されど恩恵^{めぐみ}の賜物^{たまもの}は、かの咎^{とが}の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人



の死にたらんには、まして神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。

「恩恵の賜物」というのは、あんなアダムめぐみの咎とは比べものにならない、あんなアダム一人の咎によって多くの人が死ぬなんてことは。「神の恩恵と神の愛めぐみ」、それから「一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物」。ここに二つ恩恵が出てくる。神様はもとと恵みの神様なんです。アブラハムの蹟きにもかかわらず、一方的にご自身の愛の思いを貫こうとなさった。そういう恵みのお方なんです。それを更に強化する、強める、実質たらしめるものとしてキリストが現れる。だから、キリストにおいて神の愛は一層強まった。愛のかたまりになったキリスト。しかも、その愛のかたまりは単なる愛ではなかった。「義」というものもこのキリストの恵みの中に含まれる。

始めの一般的な神様の恵みというのは愛ですね。これはただ愛です。ところが、キリストにおいては、この義というものがその愛の中に含まれる。吸収されます。これが凄い強みなんです。愛だけだったらもうい。罪がやってきますと、みんなコロコロ、コロコロと引っくり返る。しくじるわけです。そして愛はまた強くなる。しかしまたコロコロと引っくり返る。それに対して、義というものが出てくる。

「神の義は福音のうちに現れる」

と3章に出ています。わが(神の)義は福音——即ちキリスト——わが義はイエス・キリストにおいて現れた。わが義はイエス・キリストに臨んだ。イエス・キリストこそは義のかたまりである。それをしかも無条件で与える。義を無条件で与えるという恵み、これがイエス・キリストにおいて成就するわけです。

¹⁶又この賜物は罪を犯しし一人より来れるものの如きにあらず、審判は一人よりして罪を定むるに至りしが、恩恵の賜物は多くの咎よりして義とするに至るなり。

まず恩恵の賜物、イエス・キリストによって現れた、強化された、強められたこの恩恵という賜物は凄いなだと。そんなアダム一人によってきたものではない。審きという、罪に対して審きがあり、そして死に至る。審きは一人から罪を定めたけれども、恩恵の賜物は、咎がどんなに多くても、それでも引っくり返して義を与える。そういう賜物だと。

¹⁷もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、まして恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は、一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや。

もしもアダム一人のあの咎のために、あの一人によって死というものが全人類を覆い尽くす——「王となる」というのは「支配する」ということ——そうしたならば、そこに「恩恵と義の賜物」が出てきました。「恩恵」は、神の恵み、神の愛が、キリストに表れている。キリストは愛の権化です、恵みの権化です。しかしその恵み、愛の中に義というものが更



に一本、柱が通った。

愛は包み込むものです。義というものは、善悪、正しいものを正しいとし、間違っているものに対しては審きとなって臨む。これが義の性格です。義は審きとなって表れざるをえない。義が貫くと審きになります。その審きをキリストは引き受けた。だから、恵みは単なる恵みの愛にとどまらない。審きをも全部、自分が引き受けるという形で、そこで愛と義が一つになる。これが「恩恵と義の賜物」という言葉で表されている。「恩恵と義の賜物」をキリストが全部引き受けられたから、もう妨げるものは何一つない。罪がどんなに溢れようが、咎がどんなに増そうが、

「されど罪の増すところには恩恵も^い増^やせり」

と、そういうふうにつくり返るようになっていきます。

まして恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は、一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや。

まして恩恵と義の賜物とを豊かに受ける者は、キリストの生命の中で支配者、王者として君臨できるのであると。

¹⁸されば一つの咎によりて罪を定むることの凡ての人に及びしごとく、

これは仕方がない。しかしながら、キリストというお方の正しき行い、キリストの全生涯、その極まるところは十字架です。

「あなたの御意^{みこころ}をなさせてください」

と、ゲッセマネの祈りを通してはつきりと十字架をお受けになった。死をお受けになった。このキリストの姿、在り方、行いを通して、生命がキリストをいたたく人間全部に及んだ。アダムはパターンとしてアダム型の人間全部に死が及んだ。今度は、キリストが我々に新しいパターン、モデルとなつて、キリストの生命が我々に溢れてきた。

一つの正しき行為によりて義とせられ生命を得るに至ることも、凡ての人に及べり。¹⁹それは一人の不従順によりて多くの人の罪人^{つみびと}とせられし如く、一人の従順によりて多くの人、義人とせらるるなり。²⁰律法の来りしは咎の増さんためなり。されど罪の増すところには恩恵も^い増^やせり。²¹これ罪の死によりて王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、我らの主イエス・キリストに由りて永遠の生命に至らん為なり」(ロマ5・13～21)

今度は、一人の従順、イエス・キリストという方の従順なるご生涯によって多くの人が神の懷の中にいだき取られる。神様は「義^よし」としてくださる。では、律法は何のためにあつたか。律法の役割のことが出てきます。これは罪の宣告をする役割。律法というものは罪を宣告する。律法がなかったら、罪を罪として自覚できない。良心のとかめくらしいはあるでしょうけれども、はつきり

「だめだよ、審きが臨む。あなたは地獄だよ」



と、黑白をはっきりさせるのは律法の役割です。非常にマイナスな役割しかしない。「だめ」ということしか言わない。ガラテヤ書に書いてある。

「律法を全うするのは、99点ではだめだ、すべてを全うしなければだめだ」ということを言ってます。だから、律法は呪いなんです。

……旧い自分は死んだ。新しい自分は霊なる人に生まれ変わる。肉に従っていた弱い人、旧い人は死んだ。そういう死んだ人間がどうして旧い人間の姿に戻ろうとするのか。あなた方は知らないのか、キリスト・イエスに合うバプテスマ——これは水のバプテスマを表しています。水のバプテスマは全身を水の中に浸すわけですから——それは旧い人の弔い、お葬式です。そして水から上るといのは、復活の生命、新しい生命に甦っている姿を表している。その水の中に浸けられるということは、キリストの十字架の中にぶち込まれるということ。祈りの中で十字架を瞑想して、その中に己自身をぶち込む。そこで私も一緒に十字架の姿になる。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と。旧い私は死にました。キリストは私を殺してくださいました、十字架の上で。もしたら、キリストは今度は甦られた。

ちょうど水から上った時に新しい人として生まれ変わって、水から上がってくるように、今度はキリストのご復活の姿に私も等しくされています。これをしっかり受けとる。キリスト・イエスにあるバプテスマを受けた私たちはその十字架の死に合体させられる、そういうバプテスマだと。あの十字架によって彼と共に葬られ、その死に合体せられ、そして、キリストは死人の中から甦えられた。そのように私たちも新しい生命にあずかる。私も甦る。キリストの死も復活も、そこに私は一緒になる。キリストは、私を抱きかかえてイエスさまと一緒に死んで、そして抱き抱えて甦って、天にのぼってくださいました。我らも新しい生命にあるんだと。霊なる新しい人です。

ニコデモとの対話の中で、「ひと新たに生まれずば」とある。

「水と霊によって、上から生まれなければ、神の国に入ることはできない」

というのはこの事態だ、ということのパウロは言ってくれている。旧き人は既に十字架に付けた。この旧き人が罪を犯していた。もうこの旧き人は滅ぼされたんだから、あなた方は罪に支配されない。新しい生命に甦った。新しい生命に甦ったといつても、体はまだ生きていますから、その体はいずれ死ぬんですけれども、体というやつはやつぱり罪を犯したがる。ではどうしたらいいんだという問題が出てきます。

それは次の7章、8章に答えが出てます。それは次回のお楽しみであります、ここに6章のところで、

「されば何をか言わん、^{めぐみ}恩恵の増さんために罪のうちに止るべきか、²決して然らず、罪に就きて死にたる我らは争で^{いかな}尚その中に生きんや。³なんじら



知らぬか、凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、その死に合うバプテスマを受けしを。⁴我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えらせられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。⁵我らキリストに接がれて、その死の状さまにひとしくば、その復活にも等しかるべし。我らはキリストに接ぎ木された。キリストという生命に差し込まれて、そこで、ちょうどまず十字架の死の姿と等しくなる。そうしたらもう、甦り給うから、霊体となって顕れたださったあのキリストのご復活の姿にも等しくなる。

⁶我らは知る、われらの旧ふるき人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体からだほろびて、此ののち罪に事つかえざらん為なるを。

この私たちの罪の体、肉の体がもう亡びて、これからは罪に支配されなくなる。罪の子孫として仕えることがなくなるために、ああいうことをキリストはなさってくださいました。これは霊界の事実ですから、目に見えない世界の事実です。この世の世界のものではない。カルバリの十字架は滅びました。もう跡形もない。けれども、天界の霊の神様の霊界においては、十字架は輝く十字架としてそこに燦然と輝いている。それを見ておれば生命が流れてくる。

「もう罪なんて思わなくていい。私が全部解決したから、今は恵みの世界だ。それだけ見ていきなさい。そして御霊が臨むから。今度は、御霊があなたを引っ張っていく。聖霊の力で。この御霊があなたを引っ張っていけば、海の上も歩ける。体は時々、妙なことをやるかもしれない。でも、恐れるな。御霊が勝つから。キリストだけを見ていきなさい。」

と、そういう世界へと転換していきます。

⁶我らは知る、われらの旧ふるき人、キリストと共に十字架につけられたるは、罪の体ほろびて、此ののち罪に事つかえざらん為なるを。⁷そは死にし者は罪より脱のがるるなり。⁸我等もしキリストと共に死にしたらば、また彼とともに活いきんことを信ず。

死んだ者はもはや罪から脱出してはいるはずだ。私たちがキリストと一緒に死んだのだつたら、またキリストと一緒に生きるのではないか。そのことを信じます。キリストはあの死人の中から甦られた。新しい霊の生命となって顕れてくださいました。霊体をもつて顕れてくださいました。そしてもはや、死というものはキリストを支配しない。ただ一回きり、我々の罪が原因となって死んでくださったけれども、もうそれは充分だ。もはや死はキリストを支配しない。私たちをも支配しない。私たちは永遠に生きる。

体はやがて死にます。朽ち果てます。土から生まれたものは土に還る。しかし、霊なる生命、新しいキリストのご復活の生命、霊体というものが築かれつつあるんですよ。それが、



やがて肉体が減じた時にはつきりとした姿で顕れてくる。そしてキリストの許へ引き寄せられていく。これが勝利なんですね。見ゆるものは一時的です。見えないものは永遠に続く。我々は、見ゆるものではなく見えないものに目を注ぐ。そういう世界に我々は生きているわけなんです。

9 キリスト死人の中より甦^{また}えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。10 その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神につきて活き給えるなり。11 スくのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし。

死んでくださったのは、罪に対してひとたび死んでくださった。これは新共同訳ではこの所をうまいこと訳していますね。文語のほうではややわかりにくい翻訳ですけども。新共同訳では、

「10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」

キリスト・イエスに結ばれて、キリスト・イエスと直結、あるいはキリスト・イエスに包みこまれて、神様に対して生きているのだと、はつきり自覚しなさいと。そういうことです。

●ガラテヤ書1～2章(律法と福音)

それで、さきほどこの関係箇所というので、いくつか書きました。つまり、律法というものと、それから福音というものの関わりです。ローマ書では簡単に、430年後に律法というものが現れたけれども、こんなものによってアブラハムに賜った約束がくつがえるわけがない、ということを言いましたが、それに関してもうちよつと詳しく書いているのがガラテヤ書なんです。

ガラテヤの人たちは非常に単純な人たちだった。パウロの伝道を通して簡単に信じた。簡単に信じたから、簡単に引っくり返ったんです。これが恐ろしい。簡単に信じて、簡単に喜んでいる人は、ちよつと揺さぶられると、コロツと引っくり返る。だから、我々は鍛えられなければいけないということがここからも分かる。ガラテヤ書1章11節、

「11 兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由れるものにあらず。

12 我は人より之を受けず、また教えられず、唯イエス・キリストの黙示に由れるなり。

そして、ユダヤ教の頃は、私はひどいことをやっていたんだと。ユダヤ教に対して熱心で、



律法の道では誰にも負けない立派な律法遵守者であった。ところが、

15 されど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給える者¹⁶ 御子を我が内に顕して其の福音を

御子に関するよきおとずれ、「福音」というのはキリストのおとずれ、キリストご自身ということ。

異邦人に宣伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず、¹⁷ 我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。

18 その後三年を歴て、ケパを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと偕に留りしが、¹⁹ 主の兄弟ヤコブのほか孰の使徒にも逢わざりき。」(ガラテヤ1:11～19)

それからまた伝道が始める。ところが、2章へ行きますと、

「その後十四年を歴て、バルナバと共にテトスをも連れて、復エルサレムに上れり。² 我が上りしは黙示に因りてなり。

そこで何が起ったかといえますと、このガラテヤの人たちがユダヤ人たちによつて惑わされたわけです。その惑わす者たちが入ってきたのは、4節にありますように、

4 これ私か^{ひそ}に入りたる偽兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有^もてる自由を窺^{うかが}い、且われらを奴隷とせん為なり。

私たちがキリスト・イエスから賜ったこの本当の自由を奪いとして、もう一回律法の奴隷とする目的で彼らは入りこんできたのだと。そして、ペテロたちと自分とどういう関わりがあるかということに関しては7節に、

7 反つてペテロが割礼ある者に対する福音を委ねられたる如く、我が割礼なき者に対する福音を委ねられたるを認め、……⁹ また我に賜わりたる恩恵をさとりて、柱と思わるるヤコブ、ケパ、ヨハネは、交誼^{まじわり}の印として我とバルナバとに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼らが割礼ある者に往かん為なり。」(ガラテヤ2:1～9)

そういう役割分担が決まった。そうやって順調にやってきたんだけど、ある時、ペテロがアンテオケにやって来た。一緒にご機嫌よく過ごしていたけれども、古い律法遵守者たちが入り込んで来た時に、ガラツとペテロは態度を変えた。そこで大喧嘩になったというところがここに書かれている。

使徒行伝の10章をちょっと見てください。ペテロ自身もコルネリオと呼ばれて行きました。コルネリオは異邦人です。始めはペテロは、

「いや、私は異邦人の所へは行きません。彼らは穢^{けが}れたる民族ですから参りません」



という思いだったが、お昼の祈りの時に不思議な幻を見る。大きな白い布が下りてきて、その中にたくさんの穢れた動物がいっぱいあって、「それを屠って食べろ」と言われた。

「いやいや、とんでもない。そんなものは食べられません」

「神が清めたものを穢れたと言うな」

と、それが三度あった。これは何事かと思つて屋上から下りてきたら、コルネリオから遣わされた使いがいて、

「私はかくかくの者で、主人のコルネリオから遣わされて参りました。どうぞ、来てください」

「ああ、これは異邦人の所へ行けということか」

ということで、ペテロは行くわけです。そして、御言を伝えていると、伝えている時に聖霊が降った。割礼も律法も問題なしなんです。もう話している間に聖霊が降った。

「ああ、そうなんだ。神様は、ひとつ越えられた。割礼や律法という世界を飛び越えた所で、異邦人を無条件にキリストによつて祝福された。そして今、聖霊を賜った」

ということをペテロは経験した。そういうことがありました。

だから、パウロがエルサレムに行った時にも、ペテロたちはよく分かってくれたはずなんです。ヤコブなんかはまだ疑心暗鬼ですけれども、バルナバとかと話を分かつてくれることにはなるんですが。そういうことがあった。使徒行伝の15章に、

「¹或人^{ある}々ユダヤより下りて、兄弟たちに『なんじらモーセの例に^{したが}いて割礼を受けずば救わるるを得ず』と教う。²ここに彼らとパウロ及びバルナバとの間に、大なる^{あらそい}紛争と議論と起りたれば、兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問わしめんと定む。³かれら教会の人々に見送られて、ピニケ及びサマリヤを経、異邦人の改宗せしことを具に^{ついで}告げて、凡ての兄弟に大なる^{よろこび}喜悅を得させたり。⁴エルサレムに到り、教会と使徒と長老とに迎えられ、神が己らと^{とも}偕に在して^な為し給いし^{すべ}凡ての事を述べたるに、⁵信者となりたるパリサイ派の或人々立ちて『異邦人にも割礼を施し、モーセの律法を守ることを命ぜざる可^べからず』と言う。

⁶ここに使徒・長老たち此の事につきて協議せんとて集る。⁷多くの議論ありし後、ペテロ^た起ちて言う

『兄弟たちよ、汝らの知るごとく、久しき前に神は、なんじらの中より我を選び、わが口より異邦人に福音の言を聞かせ、之を信ぜしめんとし給えり。⁸人の心を知りたもう神は、我らと同じく、彼等にも聖霊を与えて証^{あかし}をなし、⁹かつ信仰によりて彼らの心をきよめ、我らと彼らとの間に隔^{へだて}を置き給わざ



りき。¹⁰然るに何ぞ神を試みて、弟子たちの頸に我らの先祖も我らも負い能わざりし軛をかけんとするか。¹¹然らず、我らの救わるるも彼らと均しく主イエスの恩恵に由ることを我らは信す』

¹²ここに会衆みな黙して、バルナバとパウロとの、己等によりて神が異邦人のうちに為し給いし多くの徴と不思議とを述ぶるを聴く。¹³彼らの語り終えし後、ヤコブ答えて言う

『兄弟たちよ、我に聴け、¹⁴シメオン既に神の初めて異邦人を顧み、その中より御名を負うべき民を取り給いしことを述べしが、¹⁵預言者たちの言もこれと合えり。……¹⁹之によりて我は判断す、異邦人の中より神に帰依する人を煩わすべきにあらず。²⁰ただ書き贈りて、偶像に穢されたる物と、淫行と、絞殺したる物と、血とを避けしむべし。……²⁷之によりて我らユダとシラスとを遣す、かれらも口づから此等のことを述べん。²⁸聖霊と我らとは左の肝要なるものの他に何をも汝らに負わせぬを可しとするなり。²⁹即ち偶像に獻げたる物と、血と、絞殺したる物と、淫行とを避くべき事なり、汝等これを慎まば善し。なんじら健かなれ』

³⁰かれら別を告げてアンテオケに下り、人々を集めて書を付す。³¹人々これを読み慰安を得て喜べり。』(使徒行伝15・1～30)

これで一応、決着がついたというわけです。

ところが、ガラテヤ書2章11節、

「¹されどケパがアンテオケに来りしとき、責むべき事のありしをもて面前^{まのあたり}これと諍^{あらそ}いたり。

ペテロにけしからんことがあったので、パウロは公衆の面前でペテロを叱責した。なかなかできることではありませんよね、ペテロというのはエルサレム大本山の一番柱ですから、それを相手にして一步もゆずらない。今だったら、法王を相手にして闘うようなものです。理由は何かというと、

¹²その故はある人々のヤコブの許より来るまでは、かれ異邦人と共に食しいたるに、

ヤコブというのは、律法を守る急先鋒ですから、イエスの弟子であつても、一番いわばユダヤ教の正統派だったわけです。その所から遣わされた人たちがやって来ると、コロッとペテロは態度を変えた。

かの人々の来りてよりは、割礼ある者どもを恐れ、退きて異邦人と別れたり。¹³他のユダヤ人も彼とともに偽行をなし、バルナバまでもその偽行に誘われゆけり。¹⁴されど我かれらが福音の真理に循いて正しく歩まざるを見て、会衆の前にてケパに言う『なんじユダヤ人なるにユダヤ人の如くせず、異邦人



の^しごとく生活せば、何ぞ強いて異邦人をユダヤ人の如くならしめんとするか』
そういう偽善に対して自分は黙っておられなかった。ペテロに言った、

「あなたはユダヤ人であるのに、異邦人と同じような生活をここへ来てアンテオケ
でやっているではないか。ところが今は急に異邦人に対して、ユダヤ人と同じよ
うな生活をしろ、割礼を受けろ、律法を守れと言いだした。とんでもない」

ということをやったわけです。まあそれ以上のことはここに書かれていませんけれども。

15 我らは生^{うまれながら}来のユダヤ人にして、罪人なる異邦人にあらざれども、16 人の義
とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由る
を知りて、キリスト・イエスを信じたり。

人が神様に義とされるのは、人が神様によしとしていただけるのは、律法の行いではない。
ただキリスト・イエス様に身をゆだねる、その恵みに身をゆだねるということだけだ。そ
のことが分つたので、イエス様に身をゆだねたのだと。

これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰によりて義とせられん為な
り。

これは律法の行いによるのではなく、イエス・キリストに身をゆだねるという信を通して
義とせられる、受け入れていただく。つまり、アブラハムにつながる。

律法の行為によりては義とせらるる者一人だになし。」(ガラテヤ2・11～16)

と、ここではつきりと言ってます。

●ガラテヤ書3章(キリストの十字架)

それから第3章へ行きますと、今度はガラテヤにいる人たちに対して、

「^{おろか}愚なる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられ給いままなるイエス・キリ
スト、汝らの眼前に顕^めされたるに、誰が汝らを誑^{たが}かししぞ。²我は汝等より
唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴き
て信じたるに由るか。³汝らは斯くも愚なるか、御霊によりて始りしに、今
肉によりて全^まうせらるるか。⁴斯程^{かほど}まで多くの苦難^{くるしみ}を受けしことは徒然^{いたずら}なる
か、徒然にはあるまじ。

あなた方は、イエス様が十字架につけられた、そのことをひたすら信じた。その十字架
に付けられ給いしイエス・キリストを信じた。それによつて御霊を受けた。ところが今、
コロッと変わつて引っくり返つて、立派なわざをしなければいけない、ユダヤ人と同じよ
うに律法を守り、立派な信者にならなければならないと、そういう旧い道に舞い戻ろうと
しているではないか。よくよく聞いておくけれども、あなた方が御霊を受けたのは、律法
を守つたからなのか、そのご褒美としていただいたのではないだろ。ただ十字架の主さま
を無条件に信じた。無条件に御霊をいただいた。それだけではないか。御霊で始まつたのに、



今は肉によって全うする、自分の立派さ——自分が律法を守って、「このように立派な信者として今、修行中であります」といった——そんなことによって神の国に入ろうとするのか。御霊によって始まったのに、今は肉によって全うしようとしている。いろんな苦しみを受けた。でも、ひるまなかつたと。

5 然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。6 録して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。

そして、律法というのは何だったのか。

12 律法は信仰に由るにあらず、

律法と信仰は相反する。

反^{かえ}って『律法を行う者は之に由りて生くべし』と云えり。

律法を行おうとしたら全部やらないといけない。これは10節に出てきます。

10 されど凡て律法の行為による者は詛^{のろい}の下にあり。録^{しる}して『律法の書^{ふみ}に記されたる凡ての事を常に行わぬ者はみな詛^{のろい}わるべし』とあればなり。

すべての条項を日々全うしないと、呪われる。99点ではだめだと。

11 律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明かなり『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。

ではいったい、律法とは何なのかということになりますが。

13 キリストは我等のために詛^{のろい}わるる者となりて、律法の詛^{のろい}より我らを贖い出し給えり。

キリストは私たちのために呪われてくださったって、律法という呪い、律法が呪いとなって、罪を宣告し死をもたらす呪いとなった。それを全部引き受けてくださった。キリストご自身^みが呪われて、私たちをそこから贖い出してくださった。救い出してくださった。

録して『木に懸けらるる者は凡て詛^{のろい}わるべし』と云えばなり。14 これアブラハムの受けたる祝福の、イエス・キリストによりて異邦人におよび、且われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。

あのアブラハムが無条件に神を信じて、無条件に受け入れていただいた。その信仰に連なるため、そして約束の御霊をくれたんだと。

それではいったい、律法は何の役割にあるかということが15節から出てきます。

15 兄弟よ、われ人の事を藉^かりて言わん、人の契約すら既に定むれば、之を廃しまだ加うる者なし。16 かの約束はアブラハムと其の裔^{すえ}とに与え給いし者なり。多くの者を指すごとく『裔々に』とは云わず、一人を指すごとく『なんじの裔に』と云えり、これ即ちキリストなり。17 然れば我いわん、神の預^{あらか}じめ定め給いし契約は、その後四百三十年を歴て起りし律法に廃せらるること



なく、その約束も空しくせらるる事なし。

神様がアブラハムに約束された。それが430年後に現れてきた律法というものによって簡単に無に帰するのか。そうではない。律法というのはいったい何なんだろうかと。21節、

21さらば律法は神の約束に悖る^{もと}か、決して然らず。もし人を生かすべき律法を与えられたらんには、実に義とせらるるは律法に由りしならん。22されど聖書は凡ての者を罪の下に閉じ籠^こめたり。これ信ずる者のイエス・キリストに対する信仰に由れる約束を与えられん為なり。

ということは、律法によつては罪の自覚が生じるばかりだ。もがいてももがいても、そこから逃^{のが}れられない。そういうふうにして、人間のだめさ加減を徹底的に知らしめるという役割をした。そうすると、逃げ道はどこにあるか。

「福音の所へやつて来い、イエス・キリストだよ」

「本当にそうでした」

ということを骨の髄まで知るために律法というものがはつきりと与えられた。簡単に信じたらコロツと引っくり返る。けれども、戦いを経たのちに、

「これしかない」

とすがりついたものは絶対に離れない。そういういわば教育係、養育係、これを律法がやった。それが23節からです。

23信仰の出で来^{きた}らぬ前は、われら律法の下に守られて、後に顕れんとする信仰の時まで閉じ籠められたり。

キリストへの信仰、キリストを受けとるといふ、そのキリストが出てくるまでは我々は律法というものに監視されていた。それは我々の苦しみで、閉じ込められていた。結局は律法では我々はどうにもならないという呻吟状態の中に追い詰めることによって、キリストを待望する。

「ああ、われ悩めるものなるかな。この死の体^{からだ}より私を救ってくれるものはいるか。それはイエス・キリストだ。この人がすべてだ。この方が一切を解決してください」

ということがはつきりと分かるように、律法は私たちを追い詰めていった。

24かく信仰によりて我らの義とせられん為に、律法は我らをキリストに導く守役となれり。

信仰によつて我らが義とせられる。アブラハムにつながる。でもアブラハムを越えていきます、キリストという方は。そのために律法は、私たちをこのキリストという方に導くお守り役の役目を果してくれた。けれども、このキリストという方が現れた以上、もう律法は要らない。もうお役ごめん。お手伝いさんは帰ってください。ベビーシッターは帰ってください。お母さんが帰ってきたから、お父さんが帰ってきたからもういいよ、というわ



けです。一時的に律法という方のお世話にもなったけれども、律法は何者でもなかった。「およそ生命に導くべき律法が私を死にもたらしすことがよく分った」というのが、次の7章に出てくる。

²⁵されど信仰の出で来りし後は、我等もはや守役の下に居らず。²⁶汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。²⁷凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣^きたるなり。

あなたはこのようなわけで、信仰によるキリスト・イエスの中でみんな神の子だ。もうあのバプテスマによつてキリストと合体したあなた方は、キリストを着てしまった。キリストという上衣^{うわぎ}を着てしまったら、その上衣のキリストは我々の体の中まで変えてくださる。単なる上衣ではない。中まで変えてくださる。そういう浸透力をもった上衣である。霊なる衣を着せてくださる。我々は新しく甦^{よみがえ}っている。そういうわけで、あなた方はイエス・キリストの中でみんな神の子だ。キリストと合体したあなた方はキリストを着ている。

²⁸今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝

らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。」(ガラテヤ3:1～28)

もうユダヤ人もギリシア人も、律法があろうとなかろうと、そんなことは全部乗り越えて、みんなキリスト・イエスにあつて一体である。そういうふうに言ってます。

●ガラテヤ書4～5章

そして、4章へ行きますと、4章では後見制度のことを言ってます。未成年の間は、親の親権あるいは後見のもとにある。ところが、成人になったらそれは要らなくなる。ちょうどそのように、しばらくは律法というものに守られていた。けれども、時満つるに及んで、

「⁴されど時満つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生れしめ、

女から生まれた。つまり、我々と同じ肉の姿でイエスを世に送られた。しかし、イエスというお方は罪性というものがなかった。我々との根本的な違いは、人の姿で現れ給うたけれども、この罪の素質、罪性というものをもちでなかったようですね。それは聖霊によつて身籠もつたお方ですから。罪の誘惑は絶えず襲いかかりますけれども、罪に屈しない。罪性というものをもちでなかった。そして我々の罪性を全部引き受けてくださった。

律法の下に生れしめ給えり。⁵これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。

イエス・キリストというお方ははつきり「子」です。だから、「父よ」と呼んだ。父と子との関係は愛です。それからもう一方は「僕」です。二つの姿を持っている。「父よ」と言つて、神の懷に甘えていながら、一方、使命としては、

「御意^{みじろ}を成させてください。あなたの御意を貫いてください」

と、自分を献げておられる。これが素晴らしい。愛は甘えの関係です。でも義の僕として



キリストは貰いでくださる。その二つを同時に私たちに下さっている。だから、私たちはもう御子の御霊をいただいた。「父よ」と呼ばしめてくださる。もはや、あなた方はもう律法の僕ではない。子である。そして、子であるということは神の国を受けとる相続人だよと。

6 かく汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』
と呼ばしめ給う。7 されば最早なんじは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣^{よつぎ}たるなり。』(ガラテヤ4:4～7)

そして、

「キリストは自由を得させんために我らを解き放してくださいました」

というのがガラテヤ書5章です。

「キリストは自由を得させん為に我らを釈^とき放ちたまえり。されば堅く立ちて再び奴隷の軛^{くびき}に繋^{つな}がるな。」

「奴隷の軛」というのは律法という呪いです。つまり、割礼だとか律法だとか、そういったものを全部キリストは廃してくださいました。そして、

「自由だからと言って、罪を犯し続けていいのか。断じて然らず。罪に対して死んだ者はもはや罪に生きることとはできないじゃないか」ということです。

2 視よ、我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。

もし割礼を受けるということがあったら、キリストはあなた方にとって無用な存在、縁がなくなる。だから、割礼を受けたいと思う人に、

「なんで割礼が要るのか。割礼を受けなければ救われないということではない。キリストは割礼以前だ。割礼は祝福の徴でしかなかった。そんなものはもはや要らん。

永遠の契約と書いてあるが、割礼はもう要らない」

と。凄いですね、パウロは。

3 又さらに凡て割礼を受くる人に証^{あかし}す、かれは律法の全体を行うべき負債^{おいめ}あり。4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたる、恩恵^{めぐみ}より墮^おちたり。

割礼を受ける人に言いたい。割礼を受けるということは律法につながるということ。だから、律法の全体を行う、そこへ舞い戻ることになる。律法というものによつて義とせられると言ふ人たち、あなた方はキリストとは無縁だよと。キリストから離れたら、恵みから落ちた。私たちはそうじゃない。

5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。

御霊により、信仰により、キリストをいただくことによつて、希望をいただき、義とせられる。体が贖われて天界へ入れていただくように、その時を待っている。



6 キリスト・イエスに在りては、割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。」(ガラテヤ5:1～6)

キリスト・イエスにあつては、割礼を受けるも割礼を受けぬも、そんなことは問題じゃない。愛によつて働く信仰のみで生きる。そういうふうなことをずうつと言つてますね。

●ローマ書6章後半(永遠の生命)

このローマ書の4章から6章までを今日は見ていますが、これの背景は非常に深いわけです。だから、かなりいろんな所をこの2時間のお話の中で寄り道をいたしました。6章の後半部を簡単に見ておきましょう。

6章の後半部は、恵みの中にあるからと言つて平気で更に罪を犯し続ける、そんなことはとんでもないことだ。もうそれとは縁を切つたはずだ。罪の僕であつたはずのあなた方は、ところが今は義の僕となつた。肉なる人は罪の僕で、義とは縁がなかった。これは罪、審き、死とつながるようになる。ところが、霊なる人、新しく霊なる人は、罪と死という世界からはもう縁切りだ。それをはつきり自覚してほしいと。

体はなお、罪を犯させようとする衝動が働くかもしれない。でも、そんなものに目をふれるな、放つておけ。放つておきなさい。キリストだけを見ていきなさいと。

ローマ書8章に行きますと今度は、

「御霊、^{からだ}霊によつて体の働きを殺すならば、あなたは生きる」

と書いてある。これは私にはなかなか辛いことでしたね。なかなか体というのは頑強でね、そんな御霊が体の働きを殺してくれないですよ。特に若い人は情欲が盛んでしょ、はつきり申しまして。私のように枯れてきましたら、もうそういうものはなくなつてきますけれども。枯れるまではやはりそれは働きますよね、衝動というのは。それはとても大変なんです。けれども、そんなものは見向きもせず、ひたすらキリストにゆだねていきなさいと、私はそうお伝えしたい。

だから、もう肉なる人は見るなと。体は相変わらず、旧き体は残っていますから、それは罪に向かうかもしれないけれども、そんなものは蹴飛ばして行け。キリストだけを見て行きましょう。そうしたら、海の上も歩ける。キリストを見て歩くということは、海の上を歩くがごとしと。この罪の世の中に私は生きていますから、体も相変わらず生きています。けれども、キリストだけを見て行こう。そうしたら勝利だと。

ローマ書6章15節以下に、

「¹⁵然らば如何に、我らは律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に、罪を犯すべきか、決して然らず。

もう恵みの下にあるから何をしてもいいか。そうじゃない。罪に仕えることだつて、あなたはしようと思つたらできる。けれども、あなた方は心からキリストを愛し、キリストに



従おうとしているんだから、もうそういう旧いあなたは捨てなければいけない。キリストを着たのだから。

16 なんじら知らぬか、己を献げ僕となりて、誰に従うとも其の僕たることを。
或は罪の僕となりて死に至り、或は従順の僕となりて義に至る。

あなた方は知らないか、己を献げ僕となるならば、誰をご主人とするか、これはあなたが自由に選べる。罪の僕となって死に至るか、あるいは従順の僕、義の僕となって生命に至るか。二つの道は相変わらず残っている。それでも、あなた方はもちろん義の僕になるはずだ。もとは自分の生涯を罪の僕として捧げて、本当に下らない生活を送っていた。その果ては死であつた。ところが今は違う。新しく生まれ変わった。十字架でもう死んでいる。それをしつかり受けとつて義の僕となつて、生命に至る道をひたすら歩みなさいと。

20 なんじら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。21 その時に今は恥とする所の事によりて何の実を得しか、これらの事の極は死なり。22 然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔にいたる実を得たり、その極は永遠の生命なり。

あなた方が罪の僕であつたときは、義とは関わりがなかった。義とは無縁だつた。縁無き衆生だつた。ところが、今はもうそうじゃない。あの時は実に恥ずかしいことをやっていた。そのあげくのはては死であつた。しかしながら今はもう罪から解き放され、神の僕となった。神の愛し給う子どもである。同時に神様の聖意を行う僕。愛の子という姿と、義の僕という姿が一つになっている。神の僕となつて、そのはては永遠の生命である。

23 それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。」(ロマ6・15～23)

罪の払う価は死だ。しかしながら、

「神様が下さる賜物は我らの主キリスト・イエスにあつて受ける永遠の生命だ。ばんざい！」

と。

これが6章の最後なんです。そういうことで、2時間で大講義をいたしましたけれども、非常に今日は内容の豊かなところをコンパクトにやりましたので、どうぞ、今日のところをもう一度、記録によつて思い起こして、立派な判決を書いてください(笑)。

それでは、これで終ることにいたします。

● 祈り

主イエス・キリストさま、この暑いなかに熱心にあなたを求める方々がこのようにして集ってくださいました。私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注いで行きます。あなたは、見えない世界に生きていてくださいます。私たちはこの見ゆる世界、



罪と死の世界から、肉の働く世界から、目をあなたに向け、体をこの罪の世の中に置いておりましたが、私たちの霊は常にあなたの世界に生きています。そして常に勝っています。あなたの愛と義の勝利が私たちを常に生命へと導いてくださるからです。

このローマ書は実に深い書簡です。アブラハムの、あるいはアダムからの歴史をバックにしながら、そしてユダヤ教というとてもない人の重荷を背負いながら、しかも、それをアウフヘーベンする、乗り越えるかたちで、イエス・キリストが現れてくださり、ご自身の従順と死をもつて生命の道を示してくださった。

そのことに我々は打たれ、御霊がそれを示し給うて、私たちもアブラハムの子孫として、またパウロにつながる者として、主イエス・キリストを主と受け入れました。贖主としていただきました。それしかないということをはつきり示していただきました。

もはや私たちは説得されたではありません。仕方なしにそれに従うではありません。心から進んで主イエス・キリストを慕い、

「生くるも主のため、死ぬるも益なり」

と、本当にあなたと一体となって生きる、新しい生涯を賜りました。熾んなる生命をいただきました。

どうぞ、ここに集われたお一人お一人が日々新たにこの生命の世界の中に復活の生命をいただきつつ、乗り越え乗り越え進んで行くことができますように、^{こいねが}希い奉ります。たとえ体が罪のゆえに死に定められていようとも、

「イエスを甦らされたそのお方の御力が御霊となって働いて、私たちの死ぬべき体をも生かしてください」

と、ローマ書8章で約束されています。もはや、死を恐れません。肉体にどんな病が巣くいましようにとも、それに打ち勝つ生命の御力を顕してください。

主さま、感謝いたします。どうぞ、あなたの生命の勝利を現わしてください。

主イエス・キリストの御名によって、この祈りを御前にお献げいたします。アーメン。

